

41. 大津市真野小学校保管の春日山古墳群出土遺物

1

大津市教育委員会は、昭和53年12月24日より30日にかけて、市内堅田所在の春日山古墳群の分布調査を実施した。この調査は、開発工事に伴う遺跡の不時発見等の種々の弊害を未然に防ぎ、加えて周知の遺跡の現状を把握し、埋蔵文化財の保護に役立てることを目的とするものである。

春日山古墳群は、琵琶湖西岸の堅田集落の背後の丘陵に立地する。古墳の総数は約220基から成る湖西地方最大の古墳群である。築造時期は5世紀から7世紀初頭頃と推定され、当地域の首長としてワニ（和珥・和迄）氏が想定されている（注1）。当古墳群は丸山竜平氏によって5支群に分けられ、その中のE支群（全長65mの前方後円墳を含む）23基は、昭和49年12月23日付けで国の史跡に指定された。

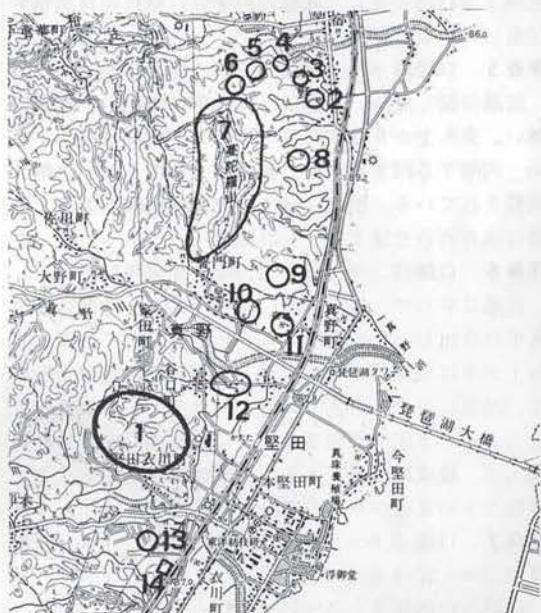
2

春日山古墳群の分布調査に関連して、当古墳群出土の須恵器が真野小学校に保管されていることを知り、この機会に未発表資料を紹介しておきたい。なお、真野小学校保管遺物として、すでに勢田廣行氏によって尖頭器が紹介されている（注2）。

蓋杯1. 口径13.7cm 器高4.8cm 稜径13.0cm



春日山全景（東から）



- 1 春日山古墳群 2 道風神社古墳群 3 石神古墳群
4 小野神社古墳群 5 石釜古墳群 6 ヨウ古墳群
7 曼陀羅山古墳群 8 唐臼山古墳 9 沢組遺跡
10 坚田遺跡 11 沢遺跡 12 中村遺跡 13 西羅古墳群
14 衣川廃寺

天井部は比較的平らで、口縁部との境に稜を有する。稜は丸くやや鈍い。口縁部は直線的に外方へ開き、端部にいたる。端部は内傾する段を有する。天井部の3分の2がヘラ削り調整されている。胎土は密で2~3mmの砂粒を含み、焼成は堅緻である。色調は灰白色を呈する。天井部に一条のヘラ記号を有する。完形品。

蓋杯2. 口径14.4cm 器高4.5cm 稜径13.6cm

天井部は比較的平らで、口縁部との境に稜を有する。口縁部は内弯ぎみに開く。端部は内傾する段を有する。天井部の3分の2がヘラ削り調整されている。胎土は密で、焼成は堅緻である。色調は灰白色を呈する。完形品。

杯身3. 口径12.2cm 器高4.7cm 受部径14.3cm

底部は平らである。受部は斜め上方に突出し、端部を丸くおさめる。立ち上がりは外反ぎみで、端部は内傾する段を有する。底部の3分の2がヘラ削り調整されている。胎土は密で、径1~2mmの砂粒を含み焼成

は堅緻である。完形品。

杯身4. 口径11.4cm 器高4.7cm 受部径13.3cm

底部は丸く、やや歪である。受部は斜め上方に突出し、その端部は鋭い。立ち上がりは直線的で、その端部は丸くおさめ、内傾する段を有する。底部の3分の2がヘラ削り調整されている。内面中央には同心円状のタタキ目がある。胎土は密で、焼成は堅緻である。色調は灰白色を呈し、底部の約半分に緑色の自然釉が付着している。完形品。

杯身5. 口径11.8cm 器高5.3cm 受部径13.9cm

底部は深く丸い。受部はほぼ水平に突出し、端部は鋭い。立ち上がりは内弯ぎみにのび、端部は丸くおさめ、内傾する段を有する。底部の3分の2がヘラ削り調整されている。胎土は密で、焼成は堅緻である。色調は淡青灰色を呈する。完形品。

杯身6. 口径12.2cm 器高3.9cm 受部径14.2cm

底部は平らで、器形全体に偏平である。受部はほぼ水平に突出し、その端部は丸く仕上げられている。立ち上がりはやや外反する部分と内弯ぎみの部分とがあり、端部はいずれも丸くおさめられている。底部の3分の2がヘラ削り調整されている。胎土は密で砂粒が混入し、焼成は堅緻である。色調は青灰色を呈する。底部に木の葉痕がみられる。

高杯7. 口径8.6cm 器高10.8cm 稜径7.6cm 基部径2.7cm 底径8.0cm

杯部の口縁部はくの字形に外反し、端部にいたる。杯底部は斜め上方にのび、口縁部との境に稜を有する。脚部はやや外反ぎみに広がり、中段下位に凹線2条を有し、大きく外反して端部にいたる。脚端部はほぼ水平で、わずかに凹状にくぼむ。櫛描烈点文が杯底部に施されている。脚部上段には線状のスカシが、下段には三角形状のスカシが三方にみられる。下段中央よりやや上方に1条6本の波状文が施されている。外面はほぼ全面に搔き目調整がされている。この搔き目調整は、櫛描烈点文が施された後にされ、脚部の波状文は搔き目調整後施されている。胎土は密で、焼成は堅緻。色調は青灰色を呈する。

壺8. 口径11.7cm 器高14.8cm 体部最大径13.0cm

口頸部はくの字形に外反して立ち上がり、口縁部で大きく外方に屈曲し、端部を丸くおさめる。体部中央よりやや上方に1条の凹線がめぐる。体部全体に搔き目調整が施されているが、凹線より上方は横ナデ調整により消されている。胎土は密で、焼成は堅緻。色調は青灰色を呈する。

壺9. 口径11.8cm 器高12.0cm 体部最大径10.1cm

口頸部は基部からくの字形に外反して立ち上がり、断面三角形の凸帶を有したのち斜め上方にのび、端部をつまみ上げている。体部最大径付近に、回転ヘラ削

り痕がみられ、この部分に径1.2cmの円孔スカシが穿たれている。底部にナデ調整が施されている以外は、横ナデ調整である。胎土は密で、焼成は堅緻。色調は灰白色を呈する。

以上の須恵器は春日山古墳群出土と伝えられ、真野小学校に保管されているもの一部である。蓋杯1と2は天井部が平坦なこと、丸く鈍い稜を有することなど比較的類似している。時期は1が2より若干先行するものと思われる。杯身3・4・5・6は3~6の順に底部が偏平なものから丸底のものへとなり、立ち上がりの端部の内傾の段が少しづつ退化し、最終的には消滅し丸くおさめるようになる。受部は上方に突出して端部を丸くおさめていたものが、水平化し、端部は鋭くなっている。また、高杯・壺・壺はそれぞれ1点のみ紹介したが、蓋杯・杯身の時期とほぼ同時期と思われる。したがって、以上の須恵器は6世紀中頃末葉から後半にかけてのものと推定される。

3

以上、春日山古墳群の出土遺物を紹介してきた。上記の遺物は古墳時代後期のもので、この時期は全国的に古墳の内部主体に横穴式石室を構築することが普及した時期でもある。当春日山古墳群の内部主体も例にもれず、総数約220基中のほとんどが横穴式石室である。春日山古墳群の北方に立地する曼陀羅山古墳群(113基)、さらに滋賀郡志賀町所在の石神古墳群(注3)、ヨウ古墳群、道風神社境内古墳群等、この地域は湖西地方でも有数の古墳密集地である。また、この地域の首長に、小野・真野・粟田・大宅・羽栗の祖であるワニ(和珥・和迩)氏が想定され、背後の群集墳にワニ部の民が考えられている。ワニ氏と言えば古代の天皇一族へ多数の后や皇后を出し、密接かつ強大な外戚関係をもっていた氏族である。

分布調査の結果、各古墳とも比較的の遺存状況は良好であり、内部構造においては所謂T字形の平面を有する横穴式石室がみられることなど多種多様である。

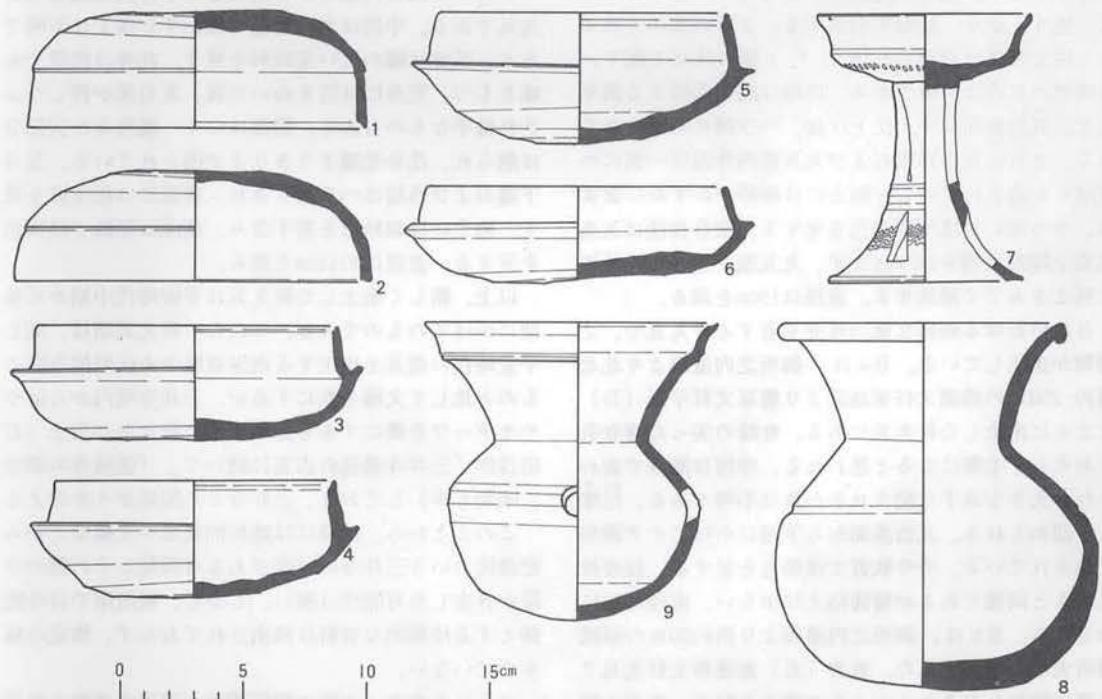
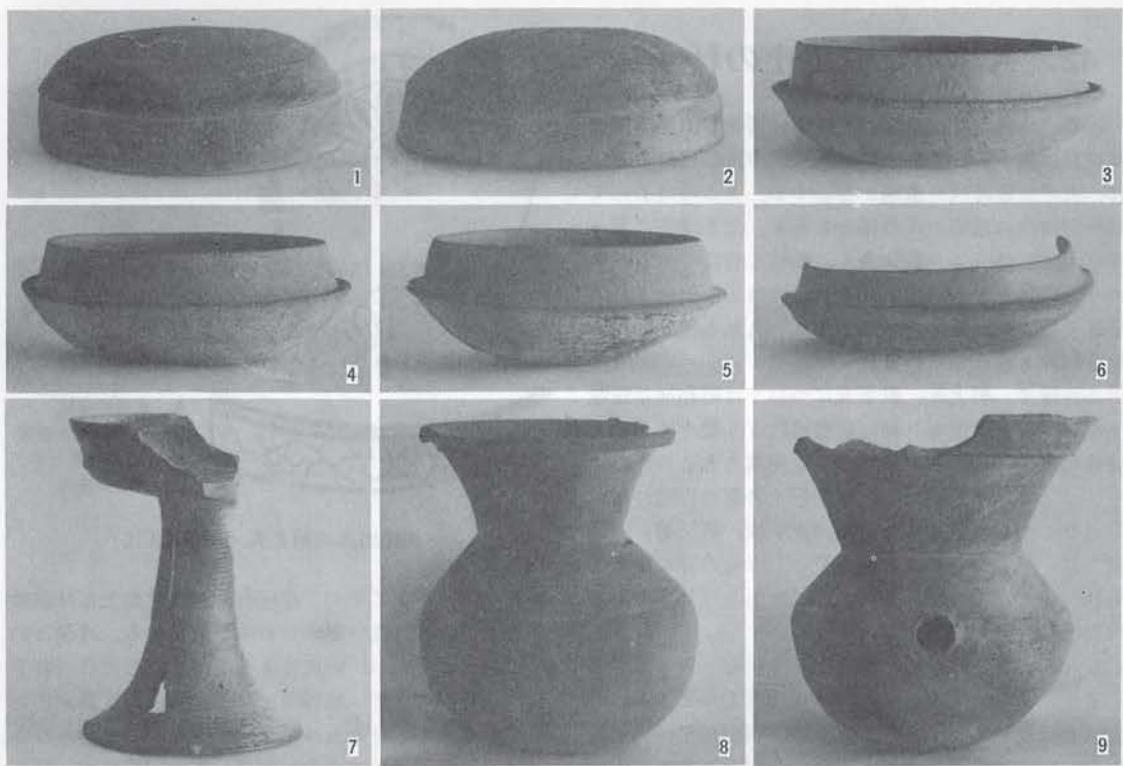
今後の課題として、内部構造を詳細に分析し、群構成等を検討することにより、湖西の古墳時代を語るうえに貴重な資料となるであろう。

(岡田晃治、永野寿治、新出高久、吉水真彦)

(注1) 丸山竜平「近江和邇氏の考古学的研究、堅田真野春日山古墳群の歴史的背景をめぐって」『日本史論叢』第4輯 1974年12月)

(注2) 勢田廣行「11. 大津市真野小学校保管の木葉形尖器」(『滋賀文化財だより』No.4 1977年7月)

(注3) 林博通、葛野泰樹「滋賀郡志賀町石神1号墳調査報告」(『滋賀県文化財調査年報 昭和49年度』1976年)



春日山古墳群出土遺物（真野小学校保管）

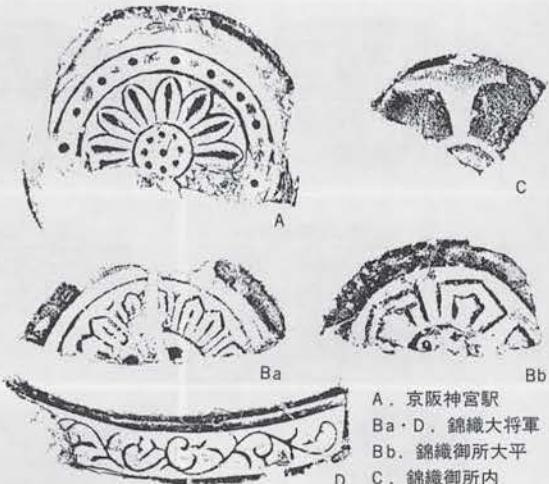
42. 大津市錦織出土の軒丸瓦

近年、大津市錦織地区の大津宮に関連した発掘調査は注目に値する。その中にあって大津宮時代の上層には、必ず平安時代の遺構が存在する。ところによつては平安時代の遺構のみの場合もある。出土遺物に至つては大津宮時代より数は多く、器種も豊富である。このうちには、平安時代の瓦も若干ではあるが含まれ、平瓦の他、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦と鬼瓦と思われる破片も出土している。

この中で、軒丸瓦、軒平瓦については昭和初年琵琶湖電鉄（現京阪電車）神宮駅敷地内より数点出土し、肥後和男氏はこの瓦について平安朝末と考えられるとし、「三井寺の子院たる尊勝院かその類の寺院に用いられたものか」（『滋賀県史蹟調査年報』第二冊）と推測され、早くから錦織に瓦を葺いた寺院の存在が考えられていた。そこで、今回新たに出土した瓦類の中で軒丸瓦について紹介したい。

現在、軒丸瓦は3種類が出土している。Aは単弁十二葉蓮華文軒丸瓦で、上記の駅敷地内より大津市教委の調査によって出土した軒丸瓦で、昭和初年に出土した軒丸瓦と同范品である。また、同駅と隣接する御所内遺跡からも破片が出土した。中房は小さく1+8の蓮子を配す。花弁は先端を少し尖らせ、弁子は瓜種状に盛り上がり、稜線を形成する。2本の圈線で狭まれた珠文帯には突出した18（？）個の珠文を配す。各境界の界線は明瞭である。周縁は高く内傾する面を有す。瓦当裏面はナデ仕上げ後、ヘラ削りが施されている。さらに瓦当外周および丸瓦部外表面は一面にヘラ削りが施されている。胎土には細砂がわずかに含まれ、やや硬い焼成で灰褐色を呈する。接合技法は瓦当裏面上端部に溝をほり込まず、丸瓦端を接合し外表面に粘土をあてて補強する。直径は15cmを測る。

Bはいわゆる剣頭文風の花弁を有する軒丸瓦で、2種類が出土している。Baは、御所之内遺跡より北北西約250mの錦織大將軍地区より唐草文軒平瓦（D）とともに出土した軒丸瓦である。弁端の尖った複弁系でおそらく七葉になると思われる。中房は圈線で表わされ、大きな蓮子が配されるが数は不明である。范摩れが認められる。瓦当裏面から下端にかけてナデ調整が施されている。やや軟質で淡褐色を呈する。接合技法はAと同様であるが補強粘土は少ない。直径は約15cmを測る。Bbは、御所之内遺跡より西約50mの錦織御所大平より出土した。重弁（五）葉蓮華文軒丸瓦で中房は隆起しおそらく1+5の蓮子を配す。花弁の幅は広く弁子も凸線で表わし重弁状になる。周縁の彫りは浅い。瓦当面全体に木目痕が明瞭に残る。瓦当裏面



錦織出土の軒丸瓦・軒平瓦（1/4）

から外周にかけてナデ・指圧痕が残る。胎土には細砂を多く含み、焼成は堅緻で青灰色を呈する。直径は約14cmを測る。なお、軒丸瓦とともに出土したDの軒平瓦は、京都六角堂・延勝寺・法勝寺等で同文品が出土しており、この軒丸瓦は「栗栖野瓦屋」産とみられる。（乗安和二三『平安京古瓦図録』本編図版解説 昭和52年）

Cは、御所之内遺跡から出土した単弁四葉蓮華文軒丸瓦である。中房は太い圈線で表わすが蓮子は不明である。花弁は幅の広い宝珠形を呈す。花弁は肉厚で丸味をもつ。花弁には范をぬいた後、瓦当面が押しつぶされ偏平なものもある。周縁はごく一部残るが大部分は削られ、花弁先端ぎりぎりまで削られている。瓦当下端および外周はヘラ削りされ、裏面には指圧痕を残す。胎土には細砂粒を若干含み、焼成は堅緻で暗灰色を呈する。直径は約11cmを測る。

以上、新しく出土した軒丸瓦は平安時代中期から後期にかけてのものである。これらの軒丸瓦類は、同じ平安時代の遺瓦を出土する南滋賀廢寺や伝崇福寺跡のものと比して文様を異にするが、三井寺境内からはやモチーフを異にするも剣頭文系の軒丸瓦が出土（石田茂作「三井寺発見の古瓦に就いて」『園城寺の研究』昭和6年）しており、三井寺との関係がうかがえる。

このことから、錦織には地形的見地や文献などから、肥後氏のいわゆる三井寺の子院である尊勝院かその類の寺院が存在した可能性は強い。しかし、現段階では寺院跡とする積極的な資料は検出されておらず、推定の域を出でていない。

こうした中で、今後の発掘調査や周辺の遺跡の発掘調査が進むにつれて、平安時代の寺院すなわち尊勝院の位置は判明していくものと思われる。（葛野泰樹）